

俵万智の短歌を扱った授業実践における省察

— 「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を繋ぐ指導を目指して—

鎌倉 大和

I はじめに

光村教科書（2学年）教材「短歌を味わおう」の中に俵万智の「思い出の一つのようでそのままにしておく麦わら帽子のへこみ」という短歌がある。これは、麦わら帽子のへこみに美しい夏の思い出を表した短歌である。これまでの授業実践を通して鎌倉が感じていることは、俵万智の短歌に対して生徒が興味関心をもち臨んでいることである。これは、あくまで鎌倉の勝手な捉えではあるが、俵万智の短歌は、破調などを試みず五・七・五・七・七の定数律の枠組みにおさまりつつも、弾むような口語短歌を鮮やかに展開させた手法により、生徒たちが自分たちの生活や感覚に言葉を重ねながら読み味わうことができるからだと考えている。したがって私は、2学年「短歌を味わう」の単元において、必ず俵万智の短歌を取り上げている。しかし、4年前より教科書に取り上げられている短歌（思い出の～）ではなく、「親は子を育ててきたと言うけれど勝手に赤い畑のトマト」を取り上げるようになった。これは、上記に述べたように俵万智の短歌が生徒たちにとって親しみやすいものであるからと、思春期を迎えている中学校2学年の生徒たちに、より自分に重ね合わせて読むことができると考えたからである。生徒たちと展開する授業は「親は子を育ててきたと言うけれど勝手に□畑のトマト」のように「赤い」の3字を空白にし、その3字になるふさわしい言葉を考えるものである。これは、これまで自分が行ってきた技法に縛られた決まり切った読み方や鑑賞という名の下に自由すぎる解釈をして満足する読み方の授業を改善したいと考えたからである。このことは、2007年より行われている全国学力・学習状況調査において知識力と知識活用力が問われ始めたように、知識だけに偏るのではない授業展開が求められていたことにも通じること、「新学習指導要領の「資質・能力」においては、三つの柱として、「知識・技能」（何を理解しているか、何ができ

るか),「思考力・判断力・表現力」(理解していること・できることをどう使うか),「学びに向かう力,人間性」(どのように社会・世界と関わり,よりよい人生を送るか)が挙げられ,授業の創意工夫や教科書等の改善を引き出していくことが重要とされていることにも関係する。

そこで,本稿では,過去4年間の俵万智の短歌を扱った授業実践における省察を行いながら,新学習指導要領の「資質・能力」における「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」の繋がりを含めながら,成果と課題に迫っていきたい。

II 本実践の実際

1 本単元名・学年

「短歌を味わおう」・2年

2 単元の目標

C 読むこと

- ① 表現技法を理解し,内容を解釈することができる。
- ② 言葉の意味をとらえ,理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け,自分の考えを広げたり深めたりする。(本時)

3 単元展開

本実践の単元展開は,以下のように計画した。

- ・第1次:短歌に使われている表現技法に着目しながら読み味わう。
- ・第2次:鑑賞文を読み,情景や作者のものの見方を読み味わう。
- ・第3次:俵万智の短歌「親は子を育ててきたと言うけれど勝手に ? 畑のトマト」のように「赤い」の3字を空白にし,その3字になるふさわしい言葉を考えながら読み味わう。

第1次,第2次における短歌は教科書教材を使用した。第1次においては表現技法(比喩,擬人法,擬態法,倒置法,反復法など)が使われている短歌を取り上げた。第2次においては情景(季節,時間,色など)や作者のものの見方(生き立ち,生き方など)に着目できる短歌を取り上げた。そして,本実践である第3次は第1,2次を踏まえながら発展させる時間と位置付け俵万智の短歌を取り上げた。

4 4年間の問いかけ方の違い

上記でも述べたように俵万智の短歌の「赤い」の3字を空白にし,その3字になるふさわしい言葉を考える授業は今年で4年目(平成

27年, 28年, 29年, 30年)を迎える。しかし, 3字を考える活動は同じであっても「問いかけ方」を毎年工夫している。それは, 以下の通りである。

- ・ H27年: 空白の3字を自由に考えるように問う。
- ・ H28年: 空白の3字を「育つ」「実る」「熟す」「赤い」の4つから考えるように問う。
- ・ H29年: 空白の3字は「赤い」だと教師が示し, どうして「赤い」になるか問う。
- ・ H30年: 空白の3字を自由に考えるように問う。

どのような経緯でこのような問いかけの変化が生まれたのかは次の項で省察を含めながら述べる。

5 本年(H30)の実践に繋がる過去3年の授業と省察

① H27年の実践結果と省察

H27年の実践は, 「赤い」という言葉を自由な発想の中で導き出して欲しいという願いだけで行った実践であった。その結果, 空白の3字として生徒から挙げられた言葉は, 「育つ・育った」(18人), 実る・実った」(10人), 「熟す」(5人), 「成った」(2人), 「枯れた」(2人), 踏むな(1人), 無回答(1人)であり, 「赤い」を挙げた生徒は0人であった。そして, 全体追究の場面で, それぞれから出された理由は以下の通りであった。

- | |
|---|
| <p>A生1: 私は「育つ」だと思います。2句目に「育てた」という言葉があり, 反復法ではないけれど, 繰り返していることに工夫があると思うからです。(多数)</p> <p>B生2: この短歌は子どもが大人になることをトマトの成長に重ねていると思います。トマトが大人になると言うことは赤い実になるということなので「実る」にしました。</p> <p>C生3: 私も考え方はCさんと同じです。テレビのCMで赤いトマトの映像が流れて「完熟トマト」というおいしそうなおいそうCMがありました。だから, 「熟す」を考えました。
(略)</p> <p>教師: Dさん, どうですか。違う考えでしたが。(「枯れる」を指名)</p> <p>D生4: 私はみんなの考えと違っていました。だから, 私が違っているの
でいいです。私の考えはなくていいです。</p> |
|---|

この実践から得られたことは, A生B生をはじめとする「育つ・育った」, 「実る, 実った」を挙げた生徒が, 表現の技法に着目して考えることができたことと, C生のように実生活の経験を根拠に考えることができたことである。これは, 第1, 2次に行った授業が第3次と繋がったからだと考えられる。しかし, D生のように技法の捉えが違ってしまふ生徒への対応が教師として全くなっていなかった。同時に,

「赤い」という考えが全くでないという場面設定を全くもっていなかった。これは、「自由な発想を」ということを勘違いした教師からの一方的な授業であった。この問題は、この教材を扱う以前の教師としての在り方として受け止めなければならないことでもあるが、このことが、次年度への問いかけ方の違いに繋がる。

②H28年の実践結果と省察

H27年度の反省を活かし空白の3字を「育つ」「実る」「熟す」「赤い」の4つから考える問いかけにした。これは、昨年度に生徒から挙げられた数が多かった「育つ」「実る」「熟す」の三つの言葉と昨年度生徒から挙がらなかった「赤い」を加えたものである。また、昨年度に挙がらなかった「赤い」を連想できるように「赤いトマトの実」の写真を掲示した。授業において、生徒が予想した結果は、「育つ」(21名)、「実る」(13名)、「熟す」(4名)、「赤い」(2名)であった。そして、全体追究の場面で、それぞれから出された理由は以下の通りであった。



- A 生 1 : 2 句目に「育てて」とあるため、やはり対になっている「育つ」という言葉がふさわしいと思います。
- B 生 2 : 達成するとか成功することを「実る」といいます。親が思っている以上に立派に成長していることを表すには「実る」が一番よいと思います。
- C 生 3 : B さんのように人が成功するという意味と似ていますが、「熟成」という言葉があります。トマトのような食べ物であれば、一番食べ頃となるので「熟す」がよいと思います。
- D 生 4 : 写真を見ていて、一番に浮かんだ「赤い」にしました。なんか、そのままの感じが一番いいと思いました。
(略)
- E 生 5 : 先生、答えを教えてください。
- 教 師 : 「赤い」です。
- 生 徒 : えー、なんで？意味が分からない。

この実践から得られたことは、A 生 B 生をはじめとする「育つ」、「実る」「熟す」を挙げた生徒が、表現の技法に着目して考えることができたことである。これは、H27年度同様、第1, 2次に行った授業が有効であったことが実証できた。教師として一番注目した「赤い」はやはりふさわしいと考える生徒が少なかった。D 生 4 の発言にあるように写真を提示した効果はあったのではないかと考える。しかし、色に着目した理由と他の三つの理由を教師側で関わらせながら考えることができなかったために、「赤い」のもつ意味が全体に広がっていくことがなかった。また、E 生 5 の発言にあるように、生徒たちの目的は、言葉の意味を追究するというのではなく、正解か不正解かを知

ることになってしまった。

③H29年の実践結果と省察

H28年度の反省を活かし空白の3字を空白の3字は「赤い」だと教師が示し、どうして「赤い」になるか考える問いかけにした。全体追究の場面で、それぞれから出された理由は以下の通りであった。

- | |
|---|
| A 生 1 : この短歌は子どもの成長をトマトの成長にたとえているから、その3字は成長に関わる言葉がふさわしいことになります。トマトは赤くなったときが一番よい時期だから「赤い」だと思います。 |
| B 生 2 : 写真を見ると、真っ先に感じるものが「赤い」となります。いろいろ考えず、シンプルに直感として感じる第一印象が大切ということだと思います。 |
| C 生 3 : まだ一人前ではない人のことを「お前はまだ青い」といいます。そう考えると、「赤い人」とは言いませんが、一人前になったことを色で表そうと思ったのだと思います。 |
| 教 師 : 昨年までの授業の中で「育つ」や「実る」「熟す」といった言葉の方がふさわしいのではないかという意見がありましたかどうですか。 |
| E 生 4 : 「赤い」にはきつとすべての意味が入っていると思います。 |
| 教 師 : じゃあ、「育つ」にしてもよいということですか？ |
| F 生 5 : そういうことではないと思いますが…。俵万智さんが「赤い」としたからやっぱり「赤い」じゃないといけないのではないですか。 |

この実践から得られたことは、「赤い」という言葉が分かっているからこそ深く考えている発言があるということである。これは、過去2年にも共通するように、技法に着目した考えのA生1や日常生活における他の言葉と関わらせたC1生の考えから何うことができる。しかし、B生のように「赤い」と分かっているからこそ意味がある発言に捉えることができるかもしれないが、言葉だけを比較するとH28年度の実践におけるD生1（前章）の発言と同じである。また、F生5の発言にもあるように、当てはまる言葉が分かっているからその言葉になるのが当たり前のような捉えになってしまっていることが課題として残った。

6 本年（H30）の授業の実践と省察

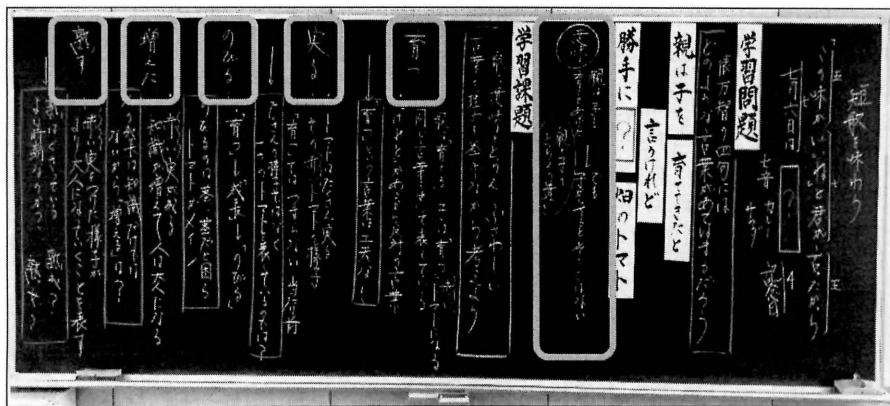
過去3年の実践から次のような工夫をして授業に臨むことにした。

- ①H27年の問いかけ方で行うこと
- ②互いの意見を批評する時間をとること
- ③板書の工夫を行うこと

①については、正解探しの授業や結果論的な授業ではなく、単元の第1、2次で学んだことをそれぞれが自分なりに理由付けし考えをもてるようにしたいと願ったからである。③については、過去の実践において、他の友の考えについてどう思うのか、感じるのかを述べ合う

時間を設定しなかったため、自分の考えを一方向的に伝えるだけになってしまっていた。したがって、他の考えに対して批評する時間をとることで、より自分の考えに対する深まりと他の考えに対する共感をもたせたいと願ったからである。②については、H27年の授業記録を分析した結果、生徒の発言の中に「赤い」という言葉が多く使われており(P3)、「赤い」という言葉が挙がらなくても黒板中に残すことで、「赤い」という言葉の意味に近づけるのではないかと願ったからである。

①H27年の問いかけ方で行った結果



本時の板書 1

3字として生徒から挙げられた言葉は、「育つ」(21人)、「実る」(8人)、「のびる」(5人)、「増えた」(3人)、「熟す」(2人)で、やはり「赤い」を挙げた生徒は0人であった。しかし、どの言葉も、子どもの成長をトマトの成長に重ねて表現していることを基にし、対比や比喩の技法に着目しながら考えている姿が伺える。この姿は、身に付けた知識・技能を活かし、思考・判断している姿と捉えることができる。過去3年の実践は「赤い」という言葉が生徒の中から出ないと授業として成り立たないという発想であったが、そこを評価するのではなく、そこまでの過程を評価する立場で授業行っていくとが大切なのではないかと考える一例となった。

②互いの意見を批評する時間をとった結果

本実践の全体追究では上記の板書(本時の板書)にもあるように「育つ」→「実る」→「のびる」→「増えた」→「熟す」の順に取り上げた。そこで、「実る」から、その言葉にした理由とともに今まで挙げら

れた言葉に対して批評するように促した。それぞれから出され批評は以下の通りであった。

- A 生 1 : 私は、2 句目に「育てて」という言葉が使われているから対として同じように「育つ」としているけれど、それだと何の工夫もないと思います。せっかく人とトマトと対象が変わっているのだから、同じ言葉ではおもしろくないと思います。
- B 生 2 : 私は、リンゴや梨が「実る」は、一つの実が立派になっているイメージですが、トマトが「実る」イメージは、多くの実がなっている様子になります。この短歌の場合、「子」という存在は一人だと思うので、なんかイメージと合いません。
- C 生 3 : トマトが「のびる」とは、どんな形になるのでしょうか。私は、茎が「のびる」、根が「のびる」という表現ならば分かるのですが、メインはトマトなので、ふさわしくない気がします。
- D 生 4 : 僕にとって、人の成長が知識が「増える」ことで、だからトマトが「増える」というイメージは、なにか悪いイメージがあります。人が成長するってことは、心とか体とか、もっとたくさんのが必要だと思えます。だから、「増える」という表現では、人の偏った成長を表しているように感じてしまいます。
- E 生 5 : 私は、「熟す」って腐る前のような意味でとらえています。失礼な意見ですが、「熟」は熟成とか熟女とかという言葉があるように、新鮮は時期を過ぎてしまっていると思うのです。
- 教 師 : どうですか、みなさん。様々な考えがでていますが、出された考えを参考にして、ふさわしい3字は決まりそうですか。
- 生徒 6 : (沈黙) なんか、どれもいいような、よくないような気がしてきました。どんな言葉が入るのだろう。

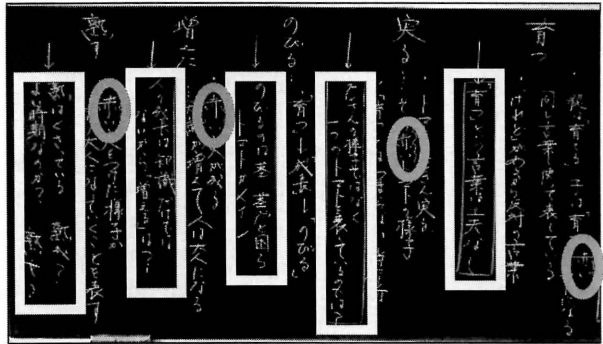
A から E 生の発言のように、子どもの成長をトマトの成長に重ねて表現していることを基に、対比や比喩の技法に着目しながら批評している姿が伺える。さらに、B 生、C 生、D 生、E 生のように、授業において身に付けた知識ではなく、自分の今まで生活してきた中における経験を根拠に考えを述べていることが伺える。この姿もまた、身に付けた知識・技能を活かし、思考・判断している姿と捉えることができる。また、生徒 6 の発言のように、様々な視点から批評されることで、3 字に対する様々な角度からの捉えが生まれ、3 字の正誤ではなくその言葉の意味を理解したいという思いに繋がっていく姿を伺うことができる。

③板書の工夫を行った結果

授業の終末は、以下のような展開になった。

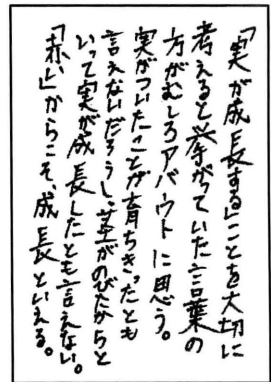
- 教 師 : まとめに入ります。実は、みなさんが挙げた中に俵万智さんが使った言葉は、ありません。
- 生徒 1 : (半分沈黙) (半分「えー」)
- 教 師 : (沈黙) でも、実はこの黒板の中にその言葉のヒントがあるのです。
- 生徒 2 : えっ。その中にもう出てるってこと？
- 教 師 : みなさんが挙げた理由の中をよく見てみましょう。
- 生徒 3 : もしかして、やっぱり「赤」？

予想していたように、生徒からは「赤い」という言葉が理由の中で多く使われていた。これは、成長したトマトは「赤い色をしている」というイメージが多くの生徒の中にあるからだと考える。



本時の板書 1

しかし、今回の実践でも「赤い」という言葉が生徒から予想されることはなかった。これは、「赤い」は、生徒にとって当たり前すぎることであるために、3字の言葉として挙がらないのではないかと考える。このことは、生徒3の発言にもあるように、「思っている、こんなに素直な言葉でよいか」ということから推察できる。しかし、右の生徒の振り返りにもあるように、授業の中で批評されることで、3字に対する様々な角度かあらの捉えが生まれ、その言葉の意味を理解したいという流れが生まれることで、「簡単だ」と思っていた「赤」が、実は深い意味のある言葉だと気付いていくことができたのではないかと思う。



生徒の振り返り 1

III 本実践の成果と課題

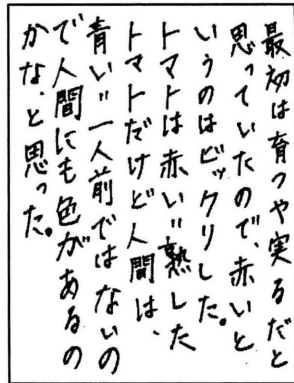
新学習指導要領の「資質・能力」においては、「知識・技能」（何を理解しているか、何ができるか）、「思考力・判断力・表現力」（理解していること・できることをどう使うか）という視点で本実践を振り返ると成果として次の2つのようなことが大切になってくるのではないかと考える。

1つ目は「単元の工夫」である。本単元において第1、2次と第3次の関わりからその大切さを伺うことができる。表現技法や自身の経験という「知識・技能」があつてこそ、それをどう理解し、使い、ふさわしい3字を考えていくという流れが生まれた。単元の中の各時間（1時間毎）に「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を繋げていく工夫ももちろん大切ではあるが、それは教師にとっても生徒にとっても苦し

い場面が多くなるように感じる。したがって、単元の工夫を行うことで、より学びのある授業が構想されていると考える。

2つ目は、「評価する場面の捉え」である。これは、「付ける力は何になるのかしっかりと定める」ということになるだろう。過去3年間の実践は、『赤い』という言葉がでなければ評価できない」という考え方であった。しかし、本実践において『赤い』が導き出されるまでにどう思考・判断していくか」という場面で評価していく大切さに改めて気付いた。このとらえ方は、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を繋げていく1つのヒントになると考える。

課題として「学びに向かう力、人間性」（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）との繋がりである。授業の振り返りに右のような気づきがあった。「赤い」が成長に繋がる言葉として受け入れることで、実生活の中で使われる「青い」という言葉に着目できた振り返りである。はたしてこれを、「学びに向かう力、人間性」として捉えてよいのだろうか。本実践の振り返りににおいて「短歌をつくってみたい」という言葉はなかった。何をもち「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」と捉えてゆけばよいのか、今後の課題である。



最初は育つや突るだと思っていたので、赤いというのはビックリした。トマトは赤い、熟したトマトだけ人間は青い、一人前ではないので人間にも色があるのかなと思った。

生徒の振り返り2

【参考文献】

- i 「サラダ記念日」 俵万智（河出書房新社 1987年）
- ii 「よつ葉のエッセイ」 俵万智（河出書房新社 1987年）

（かまくら やまと 信州大学教育学部附属長野中学校）